

# 京鹿子

昭和五年十二月一日発行  
通巻一九二号(毎月一回一日発行)



12月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その九十九



文筥にはあの日の証のこづち  
針音の妣の手遊み寒露の日  
飛びつくも打算の一つゐのこづち  
捨て案山子ひとり遊びの雲ひと  
一枝の木の葉の惑ひ地動説  
二度咲いて標本木の気まずさよ

身にぞ入む二室二房も加齢とな  
冬蝶の計り知れなき涙跡  
過去帳を飛びだし集ふ大花野  
花すすき風の傷みを抱いてゐる

大阪俳人クラブ吟行(万博記念公園)

園騷や木の実ひとつの黙通す

関西現代俳句協会吟行(吉田山)

神麓の句座へ降臨神の留守  
冬木の芽ふところに抱く神意かな  
緋袴の石と陽を噛む七五三

近詠

名譽顧問

和田 照海



瓢の笛

焚<sup>た</sup>舟の煙真直に御講風  
隣島は指呼の間とて七五三  
首塚に胴塚いづこ  
軈幕府幻影にして穴惑ひ  
尾花蛸乾く浮島日和とて

近詠

名譽顧問

塩貝 朱千



愛の木

水占や枯れても貴船菊を誉め  
揺れてゐる私は嫌ひ風の萩  
風は秋愛の木いつしか大家族  
思考止めれば綿虫に追ひ抜かれ  
うす墨の筆ペン択ぶ神無月

# 神麓集

近詠

福主宰

## 村田あを衣



明日は晴れ

姫栗へ千代紙衣木曾の宿

秋蝶や吾は主治医の瞳の中に

病衣脱ぎあの秋雲に乗るつもり

明日は晴れ月に捧げる涙壺

平らなる日日を日記に草の花

風花 故 沼田巴字

花芒 直江裕子

定めなきわが余生かな日記買ふ  
生きるすべ問はれてをりぬ十二月  
生きるとはもがくことかな山茶花咲く  
振返る晩年うれし年を越す  
風花や母の涙のありし時

草の花何か忘れてあるやうな  
花芒風の記憶の中にゐる  
目を閉ぢて黒い向日葵立ちつくす  
秋茄子の選び抜かれし色をもつ  
三点シュートきれいに決まり夏終る

秋高し 植村蘇星

寓話 高木晶子

共生の一日一笑神無月  
日の本の美しき月の名神々し  
秋高し大風呂敷を広げけり  
天高し受けから攻へほくそ笑み  
祖のお陰げ妣の口ぐせ秋深む

颯風一過一にも二にも水仕事  
風落ちの毯栗土に馴染まざる  
頂きし葡萄一粒づつ寓話  
竜淵に雑草の丈伸び勝る  
椅子一つ置きて残暑の罨とする

梟鳴く 伊藤希眸

どっと冬 井上菜摘子

赫赫と枯葉散らずに人の声  
今宵温し清水一滴掌にたらし  
梟鳴く森に一人の弦楽者  
山茶花の白を殖やせる統治かな  
庭の戴曳いて双愛さかれけり

少年や海図たたためばどっと冬  
枇杷の花伏字だらけの君だけど  
たましひの空地へはなつ冬の蝶  
立ち位置があやふや冬董にもどる  
一列はにがて落葉が駆けぬける

白露 奥田筆子

古墳村 山中志津子

少し降りきのうが嘘のけふ白露  
種厚く太らせ鶏頭多血質  
鉦叩きリズム違へし物思ひ  
街宵草裏口昨夜(よべ)の戻り口  
憑きものを落とし敗戦投手去る

今朝秋の始発電車の弾みかな  
虫の音にシャープフラット付けてやる  
ほうせんくわ弾せて地球の危機進む  
あきあかね道標の無き別れ路  
蝮姑鳴くや古道を通す古墳村

## 神麓集

## 神麓集

風 は 鷺山珀眉

八起き 西村白杼

秋澄むや嵯峨野の空を拡げをり  
山装ふ風は三百六十度  
向き変へる回遊中のいわし雲  
頂上へ野分ぐもりの空リフト  
林泉の要を締めて新松子

荒波のうねりに乗りし稲雀  
母性とはこんな重い鶏頭花  
宵闇や黙つて歩く初デート  
蝮姑鳴くや消せぬひと言悔いをりぬ  
七転び八起きの人生金木犀

鎮魂歌 亀井福恵

秋風 菊池和子

一樹覆ひ尽くしみんみん鎮魂歌  
ちちろの夜耳鳴り消えてあたりけり  
片かげり未だ胸襟閉ざしをり  
雲の峰ベンチに昼の力飯  
一行を書きそれを消し夕かなかな

おにぎりの塩は薄めに秋野へと  
秋風をふくらませ読む去来抄  
迷ひなく我が道をゆく草の花  
穴惑ひ隠れ遊びはこの辺で  
落柿舎の柿の葉ゆれや影と翳

# 神麓集

漏刻の音や白露の天智陵  
 湖北なる鄙の千手へ野菊摘む  
 雁の列翳となりゆく茜空  
 拝殿の三十六歌仙初紅葉  
 関雪の画室にひとつ秋日傘

白 露 山 田 和



# 神麓集

地球の底 安田優歌  
 膝抱けば亡き人のこゑ夕花野  
 シヤガールの仔馬空駆く天高し  
 鶏頭燃ゆ十七文字にある宇宙  
 天地の無呼吸症や油照り  
 月まどか地球の底にゐて独ひとり人

遠き木霊 本郷公子

朝刊を切り抜く秋の十名句  
 華やぎて束縛もなき黄落期  
 琴の音は遠き木霊や夕月夜  
 宵闇の地下より漏るるタンゴかな  
 芋の露集め筆文字手習ひす

葛の花 石原孝人  
 主なき峡の棚田や葛の花  
 病む母のひと日は重し花芙蓉  
 小流れの樋の青竹涼新た  
 純白に徹し芙蓉のひと日果つ  
 風の選る音色を買ふや江戸風鈴

ねこじやし 佐藤千恵

左手は猫をあやして缶ビール  
 猫にだけ聞かせる話天の川  
 肉球で乱すパソコン夜の秋  
 ねこじやし猫の本気の加速して  
 鰯雲ねこにひと声かけて出る

## 鈴鹿野風呂 十句（昭和三十三年）

アパートの影絵霜夜は二つに折れ  
太陽の子が霜けぶる畦を駈け  
北風をのがれ降り来し地表も冷ゆ  
春の画展休むひまなき亡画家たち  
芽吹かねば春の疾風が揺る大樹  
茨の刺影すねむれる嬰兒の頬  
白線はプールの底に夜も沈めり  
殉教の碑が露を乾し暁けゆく島  
露更けて臥床に沖の漁火降り積む  
干網おろす滑車に秋の日もおろさる

（真由美抄出）

## 英華採集

天のもの一つください林檎挽ぐ  
丸山海道の句に「椿落つ天の椿の一つ減り」がある。海道は俳句理論として「実相」を説いているが、この時期には未だ実相には辿りついていない。椿が落ちれば当然一つの椿が減る。この目の前の事象が「天の椿」へと詩的に広がり後の実相へと無意識に感じとった、のだと都峰前師が語っている。掲句は、この句を下敷きにしており現実の林檎を一つ挽いだ作者には当然の帰結として一つ減った天の林檎へと思いを馳せた。敬愛を込めた本歌取りである。

福岡 上原 玲子

投函を見守ってゐる十三夜

京都 竹内 久子

季語「十三夜」は別に「後の月」とも言い十五夜と同じように月見をし十五夜の芋名月に対して「豆名月」「栗名月」と呼ばれている。このように、双方の月を愛でることが習わしのようになっている。これを踏まえると、楽しみにしていた十三夜を残念ながら一緒に見られなかった作者が、心の内を吐露した文を認めた。投函に行く作者を慰めるかのように寄り添っている十三夜の光が優しく包んでいるのではないだろうか。

秋刀魚焼く九回裏のさようなら

福岡 野口 宗久

ここ数年、秋刀魚の水揚げ量が激減しているようで大きさも小ぶりになっている。どうも親潮と黒潮の流れがぶつかる場所が日本の近海から大きく外れてしまった、このことで季節の物が余り食せないのは残念なことである。最近、秋刀魚を七輪で焼くことも少なくなっているが、掲句は秋刀魚をガスで焼きながらナイター中継を見ているのである。鼠肩チームのサヨナラゲームに秋刀魚はそっちのけ。秋刀魚に付き物の「煙」とテレビの水掛けに微妙な演出効果が見える。



# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

### 水琴集

福山 大塚 文枝

落日の向かう側より秋の声

習志野 上野 紫泉

鯛雲顔に残りし旅疲れ

蕩めく陽の抱擁かりん畏まり

薄目して花野どこまでも歩く

濡らす手や今日より濃ゆき秋といふ

うやむやに終る話や虹の橋  
阿呆連の女奴やをどり笠  
かなかなや逆さ進みに缶を切る  
オムレツに焦げ目終戦記念の日  
きのふとは別の風あり吾亦紅

藤井 杏愛

帰省子に二度背戸を掃く母のあて

音のない花火と交す余命かな

長き夜や助走をつけて老の坂

訃報あり打ち消すやうに法師蟬

とねりこの花咲く日々や甲子園

四日市 松平菩提子

台風過雲それぞれに咆哮紋

経本を積み上げていざ忌明盆

白々と読経の果てしつづれさせ

人は塵に塵また人に宗祇の忌

西瓜がぶり種を昔へ飛ばしけり

東京 母壁 京子

毒だみの根を引つばれば奈落まで

二階まで土の匂ひや大夕立

宵山の灯影に淡し名の屏風

今年又小枝移りに小鳥来る  
小鳥来る母の看取りの日々遠く  
秋刀魚焼く九回裏のさようなら  
青春を丸かじりしたりんごかな  
秋刀魚やく男は背で嘘をつく  
おけら鳴くカード忘れて小買物  
宵闇やはげしき雨と急変す

福岡 野口 宗久

天のもの一つください林檎挽ぐ

福岡 上原 玲子

天上へつづく道あり芋殻焚く

夏の夜の読点小縄飛んで消ゆ

台風一過海の蒼さとウチナীগチ

鉄碗百合整列トランプト鳴る

投函を見守ってゐる十三夜

京都 竹内 久子

山門の閉ざされてをりおしつく

裏山の闇おほひくる虫の声

戸田 遠山 悟史

放出のトリチウム水秋の海  
反撃のスリーポイント秋あつし  
琴と二胡あはせる調べ秋の風  
鳳仙花うはさ話は高速道  
外出のけふは佳き日や赤とんぼ  
心経を硯に遷し秋の展梅原ひろし  
鶺鴒高音秩父に多き道祖神  
流星や平らの村のいま昔  
秋灼くる無沙汰あちこち増やしをり  
風の盆夜風に乗りに踊唄